

# 「の」に対応する韓国語の「ㄹ?ui」の省略に関する考察 名詞による連体修飾を中心に

著者	李 惠正
雑誌名	東北大学言語学論集
号	18
ページ	103-111
発行年	2009-09-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00130065">http://hdl.handle.net/10097/00130065</a>

# 「の」に対応する韓国語の「의ui」の省略に関する考察 -名詞による連体修飾を中心に-

李 惠正

キーワード： 連体修飾、格助詞、名詞句、飽和名詞、非飽和名詞

## 0. はじめに

日本語における「の」は格助詞、並列助詞、終助詞、間投助詞として使われている。特に、格助詞としての「の」は連体格、さらに主格や目的格を示すなど様々な役割を持っている。その中で、名詞を連体修飾する格助詞としての「の」と、それと同じ機能を持つ韓国語の格助詞「의」について取り上げたい。

日本語の「の」と韓国語の「의」は名詞と名詞の間に介入するという統語的性格と、先行する名詞が後続する名詞を意味的に飾る役割をするのも同様である。このような類似性を持つ「の」と「의」であるが、名詞による連体修飾節(または名詞句)を韓国語に訳すと韓国語の格助詞「의」の介入は随意的になる。つまり、「의」が使用される場合とされない場合がある。この例文を挙げると以下の様なものがある。

### (1) 必ず介入する場合

故郷 の 家族  
고향 의 가족  
\*고향 ∅ 가족

### (2) 介入しない場合

たばこ の 煙  
담배 — 연기  
?담배 의 연기

### (3) 随意的な場合

猫 の 習性  
고양이 의 습성  
고양이 ∅ 습성

この時、韓国語には格助詞の介入、不介入による連体修飾節(または名詞句)の意味が変わる場合もある。しかし、韓国語を母語とする者の使い方には明確な基準があり、その一定の基準により「の」に対応する「의」の使用を上記の3区分により明確に使い分けている。

そこで、本稿では名詞が名詞を修飾する際に使用される日本語の「の」と韓国語の「의」を比較する。「の」に対応する「의」の現れ方に注目し、「의」が必ず介入する場合と介入されない場合を分析し、その意味関係を明らかにしたい。



がみられる。それは、「の」に対する「의」の不介入や随意的介入に関することである。このことが一体、どのような意味関係においてこのような現象が起こるのかについて、先行研究から探って行きたい。

## 2. 先行研究の検討

西山(1993)は、日本語の「NP1のNP2」において「NP2」を主要語、NP1を(広義の)修飾語とし、様々な解釈ができるこの主要語と修飾語の関係を英語の「NP2 of NP1」と比較しながら「NP1のNP2」の統合的・意味的構造を分析したものである。ここで西山(1993)はNPの性質を飽和名詞句と非飽和名詞句という概念を用い、次に挙げる二つの違いについて分析した。

- (4) 早稲田文学の作家
- (5) 「山椒魚」の作者

(4)と(5)は「作家」と「作者」は意味的には類似するが、修飾部NP1と主要語NP2との関係は全く異なっている。「作家」は職業を表し、それだけで独立的に外延が規定できる。一方、「作者」は「しかじかの作品の」というパラ미터を埋めないかぎり、外延を定めることはできない。

つまり、(4)の「作家」のようにパラ미터を含まず、それ自身充足しているタイプの名詞(句)を「飽和名詞(句)」とし、(5)の「作者」のようにパラ미터を含んでいるが、その指示が設定できないかぎり外延が規定できない名詞(句)を「非飽和名詞」と呼んで区別した。また、これとは違って以下のような、飽和・非飽和の両方の解釈を許す名詞も存在する。

- (6) この町の弁護士

「この町に住んでいる弁護士」と「この町を弁護する専属の顧問弁護士」という意味があり、曖昧である。一方、英語では

- (7) The lawyer in this town  
この町に住んでいる弁護士

- (8) The lawyer of this town  
この町を弁護する専属の顧問弁護士

(7)と(8)のように「in」と「of」という前置詞の違いで区別する。しかし、「飽和名詞句」「非飽和名詞句」という概念はあくまでも「外延決定が独立にできるか否か」という意味論観点からのみ規定された概念であるという認識は重要であると述べている。

本稿では、このような西山(西山 1993)の名詞(句)に関する「飽和名詞句」と「非飽和名詞句」という概念を多く採用し、「N1のN2」の「の」に対する韓国語の「의」の現れ方を説明する。「N1」と「N2」の意味的性質を探り、今まで議論されてきた「의」の出現環境の規則を改めて考える。

## 3. 「の」に対応する「의」の現れ方

本稿の主たる狙いは「の」に対応する「의」の介入ないし、不介入による意味関係を明ら

かにすることである。したがって、その対応関係が確実に確認できる名詞による連体修飾つまり、名詞句だけに絞りたい。また、「の」や「의」が現れない複合名詞については本稿では取り上げない。

また、韓国語の「의」は「所有主-非所有主」、「親族関係」、「全体-部分」の意味関係では「의」がほとんど介入されない、この事は이익섭・채완(1999)をはじめ、多くの学者によって検証されてきた。(白 峰子2004、안경화・양명희2005)

それゆえ、ここでは今までの理論を参考にしながら、「の」に対応する「의」の実現環境を意味論的な観点で探りたい。

そこで、本稿では上記の三つの関係を「何らかの種類の所有関係」である深層の意味として定義する。

下記の例文はN2である「かばん」、「お母さん」、「隅」であり、N1の「友達」、「花子」、「図書館」に属、あるいは所有されると考えられる。

(9) 友達のかばん : 友達<sup>○</sup>かばん 「所有主-非所有主」

(10) 花子のお母さん : 花子<sup>○</sup>お母さん 「親族関係」

(11) 図書館の隅 : 図書館<sup>○</sup>隅 「全体-部分」

本稿における表記の定義を下記のようにしておく。

- ・ $\emptyset$  : 「의」の不要。現れないのが自然的である文。
- ・(의) : 随意的な介入。現れても、現れなくても非文でない。
- ・\* : 非文。
- ・? : 非文とは言えないが、意味が不自然な文。
- ・「N1」、「N2」 : 「の」、「의」の前に来る名詞をN1、後に来る名詞をN2とする。

### 3-1 「의」が必ず介入される場合

(12) 商品 の 力  
상품 의 힘  
\*상품  $\emptyset$  힘

(13) 科学 の 起源  
과학 의 기원  
\*과학  $\emptyset$  기원

(12)～(13)の例文は「の」に対応し、必ず「의」が介入しなければならない例文である。ここで「의」を省略すると何の繋がりもない名詞の羅列に過ぎなくなる。「商品が持っている力」、「科学の始まり」などの解釈が一般的であると考えられる。

(14) 男 の 子  
a. ?남자 의 아이  
b. 남자  $\emptyset$  아이

(14)は「男子の性別である子供」という意味が最も適切である。しかし、(14)は(12)～(13)の例文とは逆に「の」に対して「의」を介入すると不自然な文になってしまう例である。

「의」の介入・不介入によってその意味が変わるからである。

韓国語で「의」が不介入する場合は日本語と同じ意味を持つが、「의」が介入されると「特定されていない、ある男が親である子供（子供の性別は分からない）」という意味に解釈されてしまう。ここで、N1を「男」ではなく、同じ性別名詞である「女」に変えても「ある女が親である子供」という意味になる。

しかし、N1を性別名詞でなく、人名である「花子」や親族名詞である「おじさん」にするとN1とN2は親族関係を結び、下記の(15)、(16)の例文のように「N1を親とする子供」つまり、「花子を親とする子供」「(誰かの基準で)おじさんの子供」という意味になる。

- (15) 花子 の 子  
화자 의 아이  
화자 ㅅ 아이

- (16) おじさん の 子  
삼촌 의 아이  
삼촌 ㅅ 아이

(15)、(16)では「の」に対応する「의」は随意的であり、N1とN2の関係の意味に影響しない。

また、N2を「子」ではなく、「友達」や「先生」に変えると、

- (17) 男 の 友達  
a. ?남자 의 친구  
b. 남자 ㅅ 친구

- (18) 男 の 先生  
a. ?남자 의 선생님  
b. 남자 ㅅ 선생님

このようになり、この例文も(14)の場合と同じく、(17) b、(18) bは「性別が男である友達」、「性別が男性である先生」という一般的解釈であるが、「의」が介入されることで所有関係を結び、「ある男の友達」「ある男の先生」のように「N1が持つ何らかの関係であるN2」という所有関係と解釈されてしまう。

つまり、これらの例はN2が原因ではなく、中心語であるN1の「男」という名詞が持つ特性によるものであると考えられる。「男」という性別名詞は西山(1993)の理論から考えると、パラミターを必要としない、外延決定に関しては充足している「飽和名詞句」であると言える。その上、パラミターを必要としない「飽和名詞句」に「의」が現れる場合はN2を中心語とし、N1を限定する役割を持つことである。その観点から考えると「男」という名詞はその意味において明確な意味を持っている。「男である」という性別を表す役割以外は何の意味を持たない性質の名詞である。

そのため、N1に「男」、N2に他の性質の名詞が現れても、N2の性質が何であろうか「男であるN2」になる。つまり、N1とN2の意味関係は確実に緊密な関係であると言える。したがって、その意味関係が緊密な場合は「의」が不介入するのが自然である。言い換えると、「남자 아이」「남자 친구」「남자 선생님」は他の意味を持つことができなく、「性別が男である子供」「性別が男である友達または彼氏」「性別が男である先生」の意味になる。

(14b´) 「男 ㄷ 子」  
「남자ㄷ 아이」

(17b´) 「男 ㄷ 友達」  
「남자ㄷ 친구」

(18b´) 「男 ㄷ 先生」  
「남자ㄷ 선생님」

ように表すことができる。「N2」が中心語になり、「N1」は「N2」の限定的用法であると言える。

一方、「남자의 아이 男の子供」、「남자의 친구 男の友達」、「남자의 선생님 男の先生」は介入されないのが最も自然的である「의」が挿入されることで所有関係を成し、「男の子ども」「男の友達」「男の先生」ように「N1」が中心語になり、「男」と何らの関係、つまり本稿で定義した「何らかの所有関係を成す」と言えるような意味を持つことになる。

(14a´) 「男 ㄹ 子」  
「남자 의 아이」

(17a´) 「男 ㄹ 友達」  
「남자 의 친구」

(18a´) 「男 ㄹ 先生」  
「남자 의 선생님」

ように表すことができる。この場合は「N1」が中心語になり、「N2」が「N1」との関係を表すことになる。

他に「N2」にどんな性質の名詞に変えて考えても同じである。また、「男」と同じ性質の性別名詞である「女」を「N1」に入れ替えても同じである。

さらに、「N1のN2」の意味関係を김 (1990)の論理に従って考えても、同じ結論である。(14b)を「N1」の「男」を中心語とし、「N1の属性を持つN2」として解釈できる。この場合は「의」が生起しない。つまり、性別が「男」である友達、性別が「男」である子供、性別が「男」である先生、性別が「男」である学生の解釈が最も正しい。

しかし、「N1」と「N2」の間に「의」が介入すれば、「N1」が「N2」と何らかの関係であるまたは、所有している「N2」という解釈になる。「의」が生起することで中心語が「N1」から「N2」に変わり、「N2」の意味を限定する役割になるからである。

以上、所有関係をなす場合はよく省略されるという理論に反する例をあげて説明した。その中で「男」という名詞を中心に考察を加えた。「男」という名詞はそれ以上ほかに意味を持つことができない「飽和名詞」である。N1とN2の意味関係が緊密になるので「의」は省略しやすい。逆に「의」が省略されないとN1とN2は所有関係を結ぶことになる。

### 3-2 「의」が必ず不介入する場合

例文としては次のようなものがある。

(19) 夢 の 中  
       꿈 의 속  
       \*꿈 의 속

(20) 足 の 甲  
       발 의 등  
       \*발 의 등

(19)～(20)は「の」に対して「의」が必ず不介入する例である。これらの「N2」である「속 中」「등 甲」は何を表すのか意味的に不十分な名詞である。ゆえに、パラミターの設定を必要とする名詞である。「N1」は「N2」の意味の追加説明・意味的限定を担っている。つまり、「꿈속 夢中」、「발등 足甲」という関係が成立すると言える。しかし、下記のような所有関係を示す例もある。

(21) 自分 の 戸籍  
       \* 자신 의 호적  
       자신 의 호적

(21)は、「自分が所有している戸籍」、「自分の名前がのせられている戸籍」という意味になり、「の」と「의」を所有関係「자신 호적 自身戸籍」として考えるのが最も自然的であると思われる。しかし、「N1」と「N2」が所有関係であるにも関わらず「의」が不介入すると意味的に不自然である。つまり、(21)の例文は「N1」と「N2」が意味的補完関係として緊密であっても必ず不介入するのではないことを表す。(21)では逆に「의」が不介入されると非文になってしまう。「N1」に何かを所有することができる人間名名詞などに変えて考えると次のような例文になる。

(22) お父さん の 戸籍  
       아버지 의 호적  
       아버지 의 호적

(23) 先生 の 戸籍  
       선생님 의 호적  
       선생님 의 호적

(22)と(23)は、「의」の介入、不介入ともに自然な文になる。つまり、「戸籍 호적」は「非飽和名詞」であると言える。では、「N2」が「N1」の所有物にすることができる性質の名詞に変えて考えると次のようになる。

(24) 自身 の 本  
       \*자신 의 책  
       자신 의 책

(25) 自身 の 感情  
       \*자신 의 감정  
       자신 의 감정



(24) と (25) の例文は、N1が人間名詞の一つである「自身」である時は同じ所有の意味関係であるが、「의」が不介入すると非文になる。これはつまり、(19) ～ (20) の「N2」である「속 中」「등 甲」はN2だけでは何を表すのかを十分に説明できないことである。

これらは西山(西山 1993)の定義によると非飽和名詞としてパラミターの設定を必要としている名詞類である。これは「N1」がパラミターとしての役割を果たしていることになり、「N1」が「N2」の意味の完全性を補助するので必ず必要である。しかし、(14)で述べたように「N1」と「N2」の関係が緊密であれば、「의」は省略されやすい。その面では(21)の例は違う側面を持つ。(21)の「N2」である「호적 戸籍」も「N1」を必要とする非飽和名詞と考えられる。そこで、「N1」に「호적 戸籍」というものを持つことができる人間名詞に変えたものが(22)と(23)である。その意味関係が緊密であるから「의」は省略されても、生起しても意味には変わりがない。

しかし、「N1」に同じ人間名詞である「자신 自身」になると、「의」は省略できない。「의」が不介入すると、「N1」と「N2」の意味的繋がりがなくなる。(24)のように「N2」に飽和名詞である「책 本」、(25)のように非飽和名詞である「감정 感情」に変えて考えても「의」は省略できない。韓国語で「자신」という名詞はその中にすでに「所有」の意味を含まれており、「N2」にどんな性質の名詞と生起しても「所有」の関係しか持つことができない。そうしてみると、この場合、「N1」と「N2」の意味関係において「の」と「의」は一つの意味しか持たないため、その関係は明らかで、緊密であると言える。また、そうであれば「의」は介入されず、随意的であると定義できるが、この場合はそうではない。

以上、「の」に対応して「의」が必ず不介入する場合である例と、それに合致しない例をあげ、説明した。その中で「자신 自身」という名詞はその属性の中ですでに「所有」という性質を含んでおり、飽和名詞として扱われ「의」を省略することができる名詞である。しかし、N2と所有関係を結びながらも、「의」が必ず生起している例である。

#### 4. まとめ

本稿は、「の」に対応する「의」の実現環境に注目したもので、日本語の「の」は名詞による「修飾語と被修飾語」の関係で必ず介入されるが、韓国語では格助詞としての「の」の機能とほとんど同じ役割を担っている「의」があるにも関わらずよく省略される。この省略とは「の」に対応する「의」の意味関係によって随意的に見られる現象である。

従来までは、이익섭・채완(1999)などの述べた、必ず介入する場合と必ず介入しない場合に分け、「の」は「所有主-非所有主」、「親族関係」、「全体-部分」の意味関係では「의」を介入しない方が自然的であるという理論であった。

しかし、本稿ではこれまでの三つの意味関係を新たに定義しなおし、必ずしも合致しない例があることを指摘できた。この事が本論の意義である。

また、「N1」と「N2」の性質を究明することにおいて西山(1993)の「飽和名詞と非飽和名詞」という理論と意味的パラミター設定という概念を用いた。

「N1」を中心に「N2」が飽和名詞であれば「N1」と「N2」の関係がさほど近いとは断定できないので「의」は介入することでその意味関係を明らかにする場合が多い。「의」は「N1」が「N2」を修飾する意で持つ。しかし、「N1」を中心に「N2」が非飽和名詞であれば、「N2」は「N1」を必ず必要とし、その関係は極めて近いと言える。その時は「의」が介入されないないし省略される場合が多く、この時省略される「의」はN1がN2の意味的限定の役割をする。また、「N1」と「N2」の意味的主・従属関係が明らかであれば「의」は介入されず、主・従属関係が不明、または曖昧であれば限定や意味補完の意で使われることを検

証した。

「의」は格助詞としての「の」と意味的役割は同じであると言えるものの、「N1」や「N2」の意味性質によって役割や現れ方に影響を受ける面においては違う特徴を持っている。つまり、「の」は複合名詞を除いて名詞と名詞の間に必ず出現し、様々な意味役割を担っている。その一方、「의」は同じ所有関係においても「N1」や「N2」の名詞の性質により、その対応関係は違う実現形式をとり意味も変わることである。

本稿は、今までの理論に必ずしも合致しない一例を取り上げ「の」と「의」の対応関係による「의」の意味関係、現れ方を検討したものである。

「の」と「의」の省略現象に関する豊富な例や、「N1」と「N2」に新たな修飾語が付け加わった場合の「の」と「의」の対応関係については次回の課題にしておきたい。

## 参考文献

- 안경화・양명희(2005)「일본어권 한국어 학습자를 대상으로 한 조사 ‘의’의 교수방안」『이중언어학』 29:195-223.
- 白 峰子(2004)『韓国語文法事典』東京:三修社.
- 崔 吉時(1996)「韓国語の助詞<의>と日本語の助詞<ノ>の比較対照研究」博士論文, 大阪大学大学院言語文化研究科.
- 橋本進吉(1969)「助詞・助動詞の研究」『橋本進吉博士著作集 ; 第8冊講義集 ; 3』東京:岩波書店.
- 韓国国立国語院(2008)『標準大國語辞典』韓国国立国語院ホームページ. [http://www.korean.go.kr/08\\_new/index.jsp](http://www.korean.go.kr/08_new/index.jsp)
- 김 기혁(1990)「관형 구성의 통어 현상과 의미 관계」『한글』 209:59-97.
- 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞:用法と実例』東京:秀英出版.
- 이익섭・채완(1999)『국어문법론강의』한국:학연사.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会, 小学館国語辞典編集部編(2001)『日本国語大辞典』第二版第十卷 東京:小学館.
- 西山佑司(1990)「「カキ料理は広島が本場だ」講文について—飽和名詞句と非飽和名詞句—」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 22:169-188.
- (1993)「「NP1のNP2」と“NP2 of NP1”」『日本語学』 10:65-71.
- 生越直樹(1989)「文法の対照研究—朝鮮語と日本語—」『講座日本語と教育第5巻日本語文法文体(下)』 341-362. 東京:明治書院.

## 例文出典

村上春樹(2002)『海辺のカフカ』東京:新潮文庫.

村上春樹(김춘미訳)(2003)『海辺のカフカ=kafka on the shore』서울:문학사상사.

(東北大学大学院文学研究科 博士前期課程)  
danahan@sal.tohoku.ac.jp